

甲賀三郎 角田喜

日本推理小説大系 3

甲賀三郎 角田喜久雄集

日本推理小説大系 3 東都書房

日本推理小説大系第3巻

甲賀三郎 角田喜久雄集

定価三八〇円

著者 甲賀三郎 角田喜久雄

発行者 黒川義道

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

発行所 東都書房

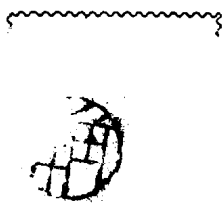
東京都文京区音羽町三丁目一九

電話 東京(九四一)三二一一

振替 東京 七二七三二一

落丁乱丁本はおとりかえします

昭和三十六年一月二〇日第一刷



目次

甲賀三郎

死頭蛾の恐怖 5

琥珀のパイプ 54

体温計殺人事件 66

情況証拠 92

四次元の断面 104

角田喜久雄

高木家の惨劇 117

奇蹟のボレロ 185

Yの悲劇 254

笛吹けば人が死ぬ 269

悪魔のような女 281

解説 中島河太郎 293

甲賀三郎

死頭蛾の恐怖

奇怪な広告

昭和九年十月二十一日の午後だった。

丸の内昭和日報社編集室で、青年記者獅子内俊次は珍らしく暇だったので、硝子窓を這いまわる一匹の蠅をぼんやり見守っていた。

窓越しに見える空は、高く澄み切って、都会では滅多に見られないような、鮮かな深海色をしていた。部屋の中は春のように温かく、春のようにノンビリしていた。

探訪記者として生れ落ちたような獅子内は、こうした編集室の静かさが嘘のように思えた。硝子窓でブズブズと羽根の音を立てている蠅が、まるで一里も二里も先にいるような感じがして、一秒が一時間にも当るような悠久さだった。それは入社以来栗鼠のように一刻も身体を休めなかった彼にとっては、始めての経験だった。

た。

（仕事がないというのは変な気持のものだなア。だが、悪い気持でもないで）

獅子内は一寸こんな風に思ったが、直ぐに退屈になって、

「何か事件がないかなあ」

と、口の中で呟いた。

すると、恰でそれが合図だったように、給仕が彼の傍に来て、

「獅子内さん、編集長が呼んでいます」

獅子内はやおら立ち上って、編集長室を軽くノックすると、中に這入った。

「事件がなくて困っているようだね」

尾形編集長はニコニコしながらいった。

「ええ」

獅子内は編集長の前にあった安楽椅子にのけ反るように腰を下して、

「詰らんですなあ」

一代の名編集長と謳われた尾形稔は、これが他の青年記者だったら、忽ちその無作法を叱責したであろうに、反って眼を細くして、駄々ッ

児をあやすように、

「暇で困っているようだから、事件を見つけてやったよ」

「本当ですか。編集長！」

獅子内は急いで身体を起して、編集長の顔を見上げた。

一代の名編集長尾形と、探訪記者の至宝獅子内のタイプアップは、一躍昭和日報を、一流紙たら

しめた。両者の関係は兄弟の如く父子の如く、いかなる親友間にも見られないような緊密な間柄だった。両者は相助け相励まして「姿なき怪盗」「犯罪発明者」等々の奇々怪々の事件の真相を発いて、昭和日報数十万の読者を陶醉せしめたのである。編集長が、獅子内の無作法を咎めないで、かえって喜ばそうするのは、決して謂れないのではない。

「いや」

と、尾形はやや狼狽気味で、

「それほど事件じゃないよ。君が贅肉の腹に堪えようだから、まあ退屈過ぎにどうかという程度のもので——」

「結構ですよ。こう暇じゃ全くやりきれないんで——」

「実は今広告部長に会って拾った話なんだが、まあこれを見給え」

尾形編集長は一枚の紙片を取り出して、獅子内に渡した。

それには次のような事が書かれていた。

世田ヶ谷区下北沢三二番地先材木置場は甚だ危険につき、本秋第一結霜あるまで、何人も絶対に立入らざるよう注意せられたし。

読み終って獅子内は変な顔をした。

「何ですか。これは」

「広告なんだよ。日報へ載せて呉れとって持って来たんだよ」

「どこから廻って来たんですか」

「本人が直々社へ持って来たんだ」

「載せるんですか」

「断ったさ。無論」

「どういう意味なんです」

「それが分らない。何が危険なのか。絶対にい
わないのさうだ」

「本人の所有地じゃないんですね」

「そうなんだ。本人の所有地なら、わざわざ新
聞に広告するより、嚴重な罰をすればいいから
ね」

「他人の所有地へ這入らないようにしようとい
うんですね」

「さよう」

「理由はいわないんですか」

「絶対にいわない」

「本人はどこに住んでいるのですか」

「その材木置場のある附近らしい」

「何をしているんです」

「その点は少し曖昧なんですが、何か研究所のよ
うなものを持っているらしい」

「どういう風な人間ですか」

「それが亦大分変っているんだ。もう六十近い
老人だそうだが、髪毛も鬚もモジャモジャに延
ばして、占者然としている癖に、いやに横柄な
奴で、金を払うのに載せんという事があるかッ
と怒鳴ったりして、まあ一口にいうと、常識の
ない奴らしいな」

「で、結局、ぶんぶん憤りながら帰った、とい

う所ですか」

「所が、最初は君の想像通りひどく怒ったそう
だが、終いにはすっかり情氣で終って、是非載
せて呉れというて、泣かんばかりに嘆願したそ
うだ。係りも弱って、結局警察の相談所へ行き
なさいといつて、追払ったさうだ」

「いつの事ですか」

「つい今し方なんだ。広告部長が一寸ここへ来
てみんな話をしたので、本人が持って来たとい
う文案を直ぐ取寄せて見たんだ」

「名前は分っていますか」

「広告部へ行けば分る筈だよ」

「行って来ますよ」

「尾形は笑いながら、

「行くかい。まあ、退屈凌ぎにはなるだろう」
獅子内と尾形は笑って別れたが、これが後に
赤死病殺人事件として、都下を震撼せしめた恐
ろしい事件の発端になるうとは、二人とも夢に
も考えない事だった。

私立探偵

獅子内は広告部へ行って、奇怪な広告の依頼
主の名と所を訊き、ブラリと外に出た。

外へ出ると、空は窓越しに眺めたのに比べ
て、一層クッキリと晴れて、肩に暖かい陽を受
けた人達が、愉快そうに往来していた。

急ぐ事もないので、彼はバスに乗って新宿に

向った。

新宿駅に這入って、小田急線の切符の売場
に行くと、彼の視線はふと前にいた一人の庭師か
小使かといった風体の男の上に落ちた。

何だか見覚えのある男である。

男の方でも振り返って、獅子内の顔をまじま
じと眺めたが、すぐにニコリと笑った。

獅子内も漸く思い出した。その人は青木作造
といつて、警視庁の刑事を長い間勤めて、部長
に昇進して、つい二三年前に後進に譲る為に
勇退し、今は確か私立探偵をやっているのだ。

刑事時代には獅子内とは可成知った仲だった。
もう年輩も六十近い筈だが、頑丈な身体で、陽
に灼けた赤黒い顔といい、逞しい筋骨といい、
労働者といつても誰疑う人はあるまい。尤も眼
だけは、所謂刑事眼でギラギラと底光りがして
いるのは隠せないが。

「獅子内さん。暫くでしたね。どちらへ」

彼はすぐ懐しうに声をかけた。

「一寸下北沢まで」

と、答えて、次ぎに低声で、

「変装ですか」

「ええ」

と、うなずいて、一寸極り悪そうに、
「化込みですや」

「どの方面？」

「やはり下北沢です」

「それは妙ですな。下北沢はどの辺？」

番地を訊くと、獅子内がこれから行こうとい

う所と、そう離れてはいないらしい。

「お急ぎですか」

獅子内が訊くと、青木は、

「なに、今日一日暇を貰ってあるんで、そう急ぎませんよ」

「じゃ、どこか近所でお茶でも呑みませんか」

「結構ですな」

獅子内は青木を誘って、附近のなるべく人気の少い喫茶店を選んで中に這入った。スマートな青年記者と、労働者風の老人との取合せは一寸奇妙であるが、そんな事に關心を持つ人は、幸いに急がしい大東京には一人もないらしい。

「どうです、私立探偵は？」

獅子内が訊くと、青木は苦笑いしながら、

「ちっとも面白くありませんよ。面白くなくても収入があるなら辛抱も出来るといふものです、その方もさっぱりありませんでね」

「そんな事はないでしょう」

「所が駄目なんです。外国では中々いい商売で、相当大きな仕事もあるように聞いていますが、日本じゃまるで駄目——まあ、高々結婚の調査か、保険会社の死因調査ぐらいのものでしてね。実は今やっているのも保険の口なんです」

「住込みまでして調査するとは、中々大きな事件ですね」

「ええ、一寸大きいんです。それに割に興味がありません。私がこの仕事を始めてから一番力瘤を入れていい事件なんです」

「どういう事ですか」

「さあ」と一寸ためらって、「新聞に出されちゃ困りますからなあ」

「絶対にあなたの迷惑になるような事はしませんが」

「そう、獅子内さんは堅いから」と、独り言のようにいって、「宜しゅうがす。お話ししましょう。実は私も誰かに話したくてウズウズしているんだから。その代り事件がすっかり落着くまで、新聞に出しっこなしですぜ」

「大丈夫です」

「相手は大へんなお金持なんです。高林熊次といひましてね、下北沢の邸なんざあ、どうして宏大なものです。附近には家作も相当もつていますし、私の睨んだ所じゃ、百万は確かでしょう。年ですか、五十二、三という所でしょう。

その人の先妻がとみというのですが、二三年前に死にました。その時の保険金が三社合して二万五千元、これはまあ死因にも疑わしい所もなし、百万円の身上の人が家内に二万五千元の保険をつけていても、別に不審はありませんから、何の問題もなかった訳です。

所が、高林は間もなく、もと邸の女中かなかしていたあさという女を後妻に直したのですが、間もなくやはり三社で合計三万円の保険をかけ、それから一年ばかり経った昨年九月に、これが病死しました。大へん健康そうな女だったといいますが、どうも病氣とあつては仕方ありません。三社とも直ぐ保険金を支払い

ました。

そこまではいいんですが、つい二月ばかり以前に、寅吉といつて、高林の兄の子だという十六になる子供がボククリ死にましたが、これには四社で三万五千元の保険がつけてありました。こうなると保険会社の方でも疑いを起さざるを得ないので、遅滞きながら調査して見ると、第一この子供の死因が怪しい。今朝までピンピンしてる子供が、夕方になるとひどい熱を出して、全身に赤い斑点を現わして、苦しみあがいて発病後三時間ぐらいで死んで終つたのです。尤もこれには相当の医師も立会い解剖までしたので、毒殺の疑いは全然ない、然し、病名はというと、無論猩紅熱でもなし、丹毒でもなし、恙虫病みたいに、未だ知られない一種の病原菌の為だろうという事にはなつたのですが、何にしても変な死に方なんです。

第二に疑わしいのは、現在高林の養女になつてゐるきぬ子という十三になる子供に、三万円の保険がつけてある。それはいいとして、もう一人、親戚の子だといつていますが、まるで小僧のように扱き遣つてゐる玉野豊という十五の子供に、五万円保険をつけてゐるんです。そこで逆のぼつて、後妻のあさの死んだ時の事を探つて見ると、だんだん怪しい節が出て来るのです。保険会社にとつち大問題ですからね。そこで私が調査の依頼を受けたのですが、こんな事は近所の聞込み位じゃ駄目ですから、高林方で、庭師兼下男を一人募集していたのを幸い

に、うまく化込んだという訳ですよ。どうです、庭師らしく見えますか。ハハハハハ」

「庭師兼下男と見るより他に見ようはありませんね。全くうまく化けましたね。住込んでからどれ位になりますか」

「先月の二十五日からですから、ざっと一月ですな」

「今のお話ですが、そんな金持が殺人までして、保険金詐取を企てるとは変じゃありませんか」

「全く、それだからこそ、保険会社の方でも最初は少しも疑わなかったのです。然し、世の中の事は必ずしも常識では判断出来ませんなあ、金持には、金があつても尚欲しいという心理があるようですなあ。尤も高林のようなのは、病的といつていいんでしょうけれども」

「何か怪しい点を発見しましたか」

「怪しい事だらけですよ。先ず第一に高林がどうして今日のような大金持になったかという、十年ばかり以前に兄の寅市の遺産を相続したからなんです、この寅市、熊次という兄弟は、二十年ばかり以前は貧乏のどん底にいて、兄の寅市は屑鉄を拾って歩いていたほどでした。然し寅市というのは中々働き者だったと見えて、だんだん出世して、欧州大戦の始まる前には小さいながらも一軒の屑鉄商を営営していましたが、それがうまく大戦にぶつかって、トントン拍子、所謂鉄成金という奴で、震災前には鎌倉に大きな家を建てて住んでいました

が、震災の時に、その家の一部が潰れて、その為^{ため}に可成^{かなり}の負傷をして、それが原因で、大正十三四年頃死にました。その時に熊次が遺産を相続したのです——」

「一寸待つて下さい。先刻の話じゃ、兄には寅吉という子があつたという事ですが、そうすると、寅市の遺産は当然その子が相続すべきだと思ふが——」

「そこなんです。よく調べて見ますと、高林が兄の子だといつて、寅吉と呼んでいた子供は、実は親戚の子供で、姓は高林ですが、名は寅吉じゃない、全く他の名で、保険証書にも、ちゃんとその名が書いてあります。寅吉というのは、高林が仮りに呼んでいた名に過ぎないのです」

「すると、兄の子なる者はなかった訳ですな」

「所が戸籍謄本を見ると、兄には寅吉という子がちゃんとあるんです」

「死んだのですな」

「いいえ、それが震災の年に行方不明になっています」

「行方不明に？」

「ええ」

「生きてるとも、死んでるとも分らないのですか」

「ええ、然し、もう失踪宣告を受けて、法律上死んだものと認められています」

「なるほど、高林は正式には、その宣告の時始めて遺産相続をしたのですな。実質的には兄の

死後でしょうけれども」

「そうなんです。けれども兄の子でもないものを兄の子だといつて、名まで寅吉と呼んで家に置いたというのはどういふものでしょう」

「変ですね」

「変といえ、高林という人間が抑^{おさ}も変ですよ。大きな邸の中で二人の子供を対^{あいて}手に、外部とは全然交際しないのです」

「先刻の話じゃ、守銭奴だという事でしたが」

「大へんな守銭奴です。金の為ならどんな事でも仕かねないと思ひますよ。それに、一種の変質者ですね。養女の方は可愛がつているようですが、もう一人の玉野豊という子供をですね、ひどく虐待するんです。どうしても病的ですね」

「その玉野というのは何ですか」

「それが又変なんです、別に何の關係もないようで、聞いて見ると、玉野は全くの孤兒なんです。ルンペンのような生活をしていたらしい。それを高林が拾い上げたものらしいです」

「そしてその子供に五万円保険をつけているんですか」

「そうなんです」

「それじゃ、怪しむなといつても、怪しまない訳に行かない。その子供を虐待するというのは、詰りは衰弱させて、殺して終おうというのじゃないのですか」

「そうかも知れません。然し、虐待するのは趣味じゃないかと思はれる節もあります。それに養女のきぬ子まで、面白がつて虐待するんです

よ。全く子供が可哀想です、時々見かねる事が
ありますよ」

「なるほど、面白い事件ですね。僕は羨やまし
いよ。あなたは実にいい事件にぶつかりまし
たなあ。しっかりおやりなさい。金額が大きい
から保険会社からもどっきりお礼が出るでしょ
う」

「ええ、まあ、一生懸命にやるつもりです。獅
子内さんの方はどんな事なんですか」

「あなたの事件に比べると、実に下らないもの
ですよ。こういう事なんですがね」

獅子内は広告の事について、掻いつまんで話
した。

青木は首を傾げながら、

「なるほど、変な話ですね。高林の家の近所
に、変った人物が住んでいるような話は聞いた
かと思いますが、何しろ自分の方が忙しいの
で、別に調べても見ませんでした——獅子内
さん、殊によると相当の事件ですね」

「あんまり期待は出来ませんね」

獅子内は気のない返辞をした。彼は実は青木
の話した高林の事件に、すっかり気を惹かれた
のだった。然し、堅い約束があるから、割り込
む訳には行かない。

青木も少し委しく話しすぎたのに気がついた
と見えて、

「獅子内さん、今の話は本当に新聞に書きつこ
なしてすよ。大分時間が経ったようですから出
かけようじゃありませんか」

と、獅子内を促した。

昆虫飼育場

下北沢の駅を降りて、最近に著しい発達をし
た市街地を通り抜けて、南方に約二軒ほど行く
とそこは最早殆んど人家がなく、疎な雑木林
や、草原や、畑地などが続いて、そこにはいく
らか武蔵野気分が残っている所の、昔の所謂郊
外地である。

その一角に、見たところ約千坪ぐらいの地所
に、金網を張った垣根を巡らして、その中ほど
に粗末なバラック建約三十坪ばかりの事務所風
の家があり、その周囲は雑草に覆われている。

一寸見ると、私立の農事試験場か、それとも園
芸場かと思われるが、ベンキ塗両開きの門柱に
は本藤昆虫飼育場と書いた木製の札がかかつて
いる。珍らしい仕事ではあるが、開設以来相当
の年月を経ていることは門柱が半ば朽ちかかっ
ていて、両開きの工場風の門扉も壊れかかっ
ているし、門標も風雨に曝されて辛うじて読める
程度になっていることで窺われる。

これが獅子内が探し当てた、奇妙な広告主の
住居だった。

獅子内は壊れかかった門を這入って、事務所
風のバラックの玄関に行つたが、中はしんと
して、人がないようだった。

「御免下さい」

三度目に大きな声で怒鳴った時に、のっそり

現われて来たのは二十四、五の無愛想な青年
だった。顔が変に蒼ぶくれて、見るから不健康
そうで、その上どことなく妙な不気味さが、彼
の身体から発散していた。

彼はのっそり立ったまま、挨拶もしない。

「僕はこういう者ですが、本藤さんにお目にか
かりたいのです」

獅子内がこういっても、やはり青年は黙って
いた。そうして、獅子内の差出した名刺を受取
ると、まるで猫のように、少しも足音を立てな
いで、奥の方へ這入って行った。

やがて、彼は再び現われた。そうして、やは
り無言で獅子内に中に這入るように、手を差出
して奥の方を示した。

獅子内の案内されたのは、埃っぽい応接室
だった。そこには粗末な卓子と椅子があり、周
囲は古ぼけた昆虫の標本で埋められていた。

やがて出て来たのは尾形編集長がいった通
り、六十近い老人で、頭髮も鬚もモジャモジャ
で、眼は落着がなくてキョロキョロと始終動
き、すべての動作挙動が、いつか獅子内が訪問
した精神病院のある患者を思い出させた。

「何の用かな」これが本藤権之進が最初にいっ
た言葉だった。

「先ほどお申込の広告の事ですがね」

獅子内も些かむとしながら、ぞんざいな口
調でいった。

「うん、載せて呉れるというのか」

「そうじゃないんです——尤も場合によっては

載せてもいいんですが、一体何が危険なんですか」

「諄い。僕はそれは絶対にいえないといったじゃないか」

「どうも然し、それが分らないと——」

「君は態々そんな事を繰返しにここへ来たのか。馬鹿な、日本の新聞ほど馬鹿なものはない。料金を支払えば喜んで載せればいいじゃないか。それが営業ではないか」

「然し、新聞には新聞の取締規則がありますから、金さえ払えば何でも載せるといふ訳にゆきませんよ」

「そんな馬鹿な取締規則は早速改めなくてはいいかん。こつちで態々金を使って、危険な事を注意しようというのに、それを留めるとは何事じゃ」

「然し、折角御注意を受けても、危険の内容が分らないと、その対抗策が——」

「対抗策も何にもいらん。近寄りさえしなければいいのじゃ」

「霜が降れば危険でなくなるのですか」

「そうじゃ。霜が降れば危険は大部分なくなる。あと一月ばかりの間じゃ」

「何とかして、直ぐその危険を除く訳には行かないのですか」

「さようさ。出来ないこともないが、然し、それは大へんじゃ。それより一月ばかり立ち寄らないに限る」

「立札を出されたらどうですか」

「いかん。そんな事は反って好奇心を挑発していかん」

「新聞広告でも同じ事じゃないですか。第一新聞広告じゃ、見落す人があるかも知れないでしょう」

「それはその人の不注意じゃから仕方がない」「地主に掛合つて、柵をしてやつたらどうです」

「それとも、警察に相談して、職権を以てやつてやつたら——」

「もう沢山だ。君から指図は受けん。君の新聞で広告を受けけないというなら、もう君には何の用もないのだ。早く帰れ」

「そういつて彼は立ち上ろうとした。」

「一寸待つて下さい」

「獅子内はここで怒らして終つては面白くないと考えたので、咄嗟に話題を転じた。」

「僕は別に広告の事で来たんじゃありません。先生が大へん珍らしいものを経営していらっしゃるというので、昆虫飼育場についてお話を伺いに来たんです」

「それは本当か」
老人はやや機嫌を直した。

「ええ先刻差上げた名刺を見て下さい。編集部と書いてあるでしょう。広告なら広告部の者が来る筈です」

「然し、君は広告の事ばかりいったじゃないか」

老人は疑ぐり深い眼で獅子内をジロリと眺めた。

「話のきっかけにお訊きただけです。一体この飼育場はいつ頃から御経営ですか」

「もう十年余りになる」

「こういう珍らしいものを、どうして思いつきになったのですか」

「君は先刻から珍らしい、珍らしいとききりいうが、昆虫の飼育という事は、学問上何等珍らしい事ではない」

「然し、こうやつて商売に——」

「それも日本で珍らしいというだけじゃ。米英では——君はサイエンチフィック・アメリカンを読んでおるか」

「いいえ。読んでません」

「新聞記者の科学に無智なのは慨嘆に堪えん事じゃ。一般の人なら兎に角、所謂操觚といつて、筆を執つて多少たりとも一世を指導しようという考えのものが、科学の通俗雑誌ぐらゐ読んでないとは、お話にならんじゃないか」

「恐れ入りました」
「サイエンチフィック・アメリカンを読んで見給え。英米では昆虫を飼育して立派に商売になつてゐることが解る。千九百三十二年の六月号にもちゃんとそのことが出てゐる。昆虫といつてもいろいろあるが、殊に鱗翅目じゃね——といつても分るまいが、つまり蝶や蛾の類じゃ。これは一般採集家からも、素人の裝飾用にも喜ばれる。これを飼育するという事は、立派に

商売になるので、英米の娯楽雑誌にも、絶えず蝶類販売者の広告が出ておる」

「それは外国の話で、日本では——」

「日本では未だ遺憾ながらそこまで行っておらん。日本では普通ありふれた標本すら、未だ一般に迎えられる。英米では野外で普通に得られるものは価値が薄くて、反って飼育による変種、或いは異常に大型のものが歓迎されるのじゃ。僕は大学を退いて以来数年その研究に没頭しとるのじゃ」

「大学？ 先生は大学にいらしたのですか」

「二十年余り教鞭を取っておった。先年頭が少し悪くなったようじゃから辞めて、ここに昆虫飼育場を開いたのじゃ」

「御研究というのは、つまり大きな昆虫を飼育するという事ですか」

「そうじゃ。最近に成功してな。尤も鱗翅目については、すでに二年以前に成功しておったが」

「例えば、どんなのですか」

「例えば——そうじゃ、君は死頭蛾という蛾を知っておるか」

「知りません」

「さして珍らしい種類ではないが、幼虫はじやがいもの葉を食うのじゃ。ごま、なす等の葉も食うがね。成虫は背中に觸體の斑紋がある。日本では『めんがすずめ』などと呼んでいるが、英語ではデッサス・ヘッド——つまり死人の頭で、直訳すれば死頭蛾じゃ。觸體蛾といつても

いい。これが英国では最大のものが羽根の開張が五吋だという。日本のものは百十ミリ、五吋よりは少し短いが大差はない。それを僕は二十センチまで育て上げたのじゃ」

ミリとかセンチとかいう単位は獅子内には苦手だったが、急いで暗算をして見ると、五吋が四寸一分、百十ミリが三寸六分、二十センチが六寸六分であるから、余程大きくなっている訳である。

本藤老人はここで外の方を向いて、手を振った。すると、それが合図だったと見えて、先刻の青年が例の如く聲音を立てないで、のっそりと部屋の中に這入って来た。

本藤老人はしきりに手真似を始めた。

獅子内はこの時に始めて気がついた。この青年は啞なのだ！

やがて青年が出て行くと、本藤老人は、「可哀そうにあれば生れながらの啞じゃ。じゃが君などよりも遙かに昆虫の知識はあるわい。僕の忠実な助手じゃ。絶対服従で、その上に絶対に秘密を洩らすことがない」

と、この時に啞の青年は標本箱を持って這入って来た。

「これじゃ、これが僕の飼育した死頭蛾じゃ」

獅子内は今までこんな巨大な蛾を見た事はなかった。三角形をした前翅はやや黒ずんで、木目のような波紋があり、やや小さい下翅は黄色くて、著明な斑紋があった。身体は肥大して、腹部には粉のような細かい毛状のものがモジャ

モジャしていた。それが一寸雀のやわらかい胸毛を思わせた。雀蛾の名はそれから出たのである。が、何よりも怪奇なのは、その背の斑紋だった。背一面に明かに觸體と見える面形が浮上っていた！

氣違いいじみた老教授と不気味な啞青年とに囲まれて、折柄秋の日が暮れて行こうとする薄明りの中で、巨大な怪奇極る死頭蛾を見せられた獅子内は、背筋が氷るように感じた。

「フフフ」老人は薄気味悪く笑いながら、

「これが僕の飼育した死頭蛾じゃ。もう時機が遅いから生きているのを見せられないのが残念じゃが、この蛾は鳴くのじゃよ。まるで二十日鼠のように鳴くのじゃ。チュウチュウといつてな、捕まえている間は鳴き通しじゃ。それが成虫ばかりではない幼虫も鳴くのじゃ。幼虫はやはり大きな四五寸もある黄色い芋虫じゃ。青い美しい筋があるわい。この虫が鳴くのじゃ。キウキウといつてな、こいつは春から夏にかけてじゃがいもの葉を食ってな、十分大きくなると、土の中に潜るのじゃ。七寸も八寸もな。そして、大きな赤褐色の蛹になるのじゃ。こいつも鳴くのじゃよ。蛹もキウキウといつて鳴くのじゃよ。ハハハハ」

老教授の眼は次第に怪しく光り出して来た。そうして、さも愉快で耐らないという風に、カラカラと笑い出したが、その笑いには、どこかに空虚なところがあつて、物凄くあたりに響くのだった。

追憶

広々とした庭だった。前日に引続いて晴れ渡った秋の朝の日ざしが、庭一面に拡がっている。

庭の一隅には霜よけの仮屋の下に、菊の鉢が一杯並べられていた。大輪、狂い咲き、懸崖、それが黄、白、赤とりどりに乱れ咲いていた。

少年は庭を掃く手を休めて、そこにあった床几に腰を下して、うっとり菊を眺めた。

少年は白い菊が一番好きだった。

少年の脳裡には薄ぼんやりと過去の追憶が浮んで来た。

やはりこんな広々とした庭だった。築山があつて、泉水があつた。泉水には赤い鯉がいた。時々ボチャリと尻尾で水を打ったり、パクパクと口を開いては浮んで来た。

やはり立派な座敷があつた。縁側には硝子戸が嵌っていた。西洋間もあつた。

菊が一面に咲いていた。白い菊が一面に——そこへ白い蝶が飛んでいた。一匹、二匹、三匹。蝶は上になり下になって、舞い狂っていた。

こんな追憶が後から後からと少年の頭に浮んで来た。それは遠い遠い昔の事のようにであり、又近頃見た夢のようでもあつた。父の顔も母の顔もどうしても思い出せない。それなのに、菊

の花と白い蝶の追憶だけははつきり浮んで来る。

少年はいつの年でも菊の花を見ると、悲しくて耐らないのだ。

少年はホッと溜息をついた。

「豊さん、何をぼんやりしているんだね」

庭に這入って来て、こう声をかけたのは庭師風の頑丈な爺やだった。が、それは私立探偵の青木作造だった。彼がいる所を見ると、ここは高林熊次の邸に違いない。豊と呼ばれた少年は、高林に養われている玉野豊だろう。

「考えごとをしているの。作さん」

青木はいずれ作吉とか作次とかいつているのだらう。ここでは作さんと呼ばれているらしい。

「又、考えごとかね。考えごといいが、せつせと掃除をしないと、又旦那様に剣突を喰うぞ」

「ええ」

豊は素直に立ち上って、掃除を始めた。

「豊さんはお邸へいつ来たといつたけな」

「三年以前だよ」

「冬だといつたね」

「寒い時だったよ。僕はもう少しで凍える所だったんだ。丁度このお邸の前で、もう動けなくなつて、それっきり分らなくなつたんだよ」

「先の奥さんに助けられたんだって？」

「うん、先の奥さんは情深い、いい人だったなあ。後の奥さんは、その時に女中をしていたん

だよ」

「後の奥さんは悪い人だったかい」

「悪い人じゃなかった。先の奥さん程優しくなかったけれど」

「奥さんのいる時分から、旦那様はあんなに厳しかったかい」

「うん。でも、今ほどじゃなかった」

「お前さんは感心な子だね。あんなに辛くされても、よく辛抱しているね」

「うん、少しも辛くないよ。だって、僕はお父さんもお母さんもないんだもの。どこへいったって、いじめられる」

「いい心がけだね、全く涙が出るよ。だが、豊さんのいう通り世間はどこへいても辛いのだから、ここはいや、あそこはいやといつていちゃきりが無い。辛抱が肝腎だよ。そのうちにはいい事もあるよ」

「僕は別になんとも思っていないよ。いい事なんかあつこないと思うけど、それでも別に何ともないよ」

私立探偵の青木はこれ以上は少年の話を聞く事が出来なかった。彼は眼頭の熱くなった眼で、あたりを見廻すと、折から向うからこの家の養女のきぬ子がやって来た。

「ああ、お嬢さんが見えた。うまくお守をするんだよ」

「うん」

傍に来たきぬ子は意地悪そうに口を曲げて、「玉野、未だ掃除がすまないの」

「はい」
「先刻から待ってるんじゃないの。早くお出よ」

「でも、掃除がすみませんから」

「いいからうっちゃっていいで」

「でも、それでは旦那様に叱られます」

「愚図愚図しているからさ。せつせとすりゃ、夙くにすんでいるじゃないの」

「僕——僕はのりいもんですから」

「本当にのろまだね。お前さんは」

「はい」

「せつせと掃きなさいッ」

「はい」
きぬ子は立ったまま、じっと豊の掃くのを見ていた。

豊が刈込んである植込の下に箒を入れた時に、ちよろちよると這い出して来たのは一匹の蛇だった。

「あれッ」

きぬ子は悲鳴を上げて逃げ出したが、蛇はちよろちよると、きぬ子の後を追って行った。

「あれッ、た、玉野、あれッ」

豊はあわてて蛇の後を追って、箒の先に引っかけようとしたが、思うように行かなかった。

「玉野、貴様は何をするのだッ」
大きな鋭い叫び声が響いた。主の高林がいつの間にか傍に立っていた。彼のステッキを握りしめた手はブルブルと顫えていた。

眼のない蛇

高林の一喝に、豊は縮み上って終った。然し、恐ろしいのを一生懸命に堪えて、

「あ、相すみませんでした」

と、慇懃な態度で、あやまった。

高林はまだブルブルと手足を顫わせて、怖い顔をして睨みつけながら、

「あ、謝っただけで済むと思うのか。馬鹿ッ」

「はい」

「貴様は何だつて、きぬ子を嫌がらせるのだッ」

「はい」

「きぬ子はお前の主人じゃないかッ。蛇をけしかけるとは何事だッ」

「け、けしかけたんじゃないかも。蛇が這い出してお嬢さんを追っかけましたから、つ、捕えようと思って——」

「嘘をつけッ。貴様が追っかけさしたのだッ」

「ち、違います」

「黙れ、第一、このごろ蛇がこんなところにウロウロしている筈がない。貴様がどこかで捕えてそっと置いたんだらう」

「そ、そんな事はありません。掃こうと思つて、植込の下に箒を入れたら、ニョロニョロと這い出して来たんです」

「違うわ」

高林の傍に寄り添うようにしていたきぬ子が、口を尖らしながらいった。

「玉野は態と蛇を追出したのだわ」

「お、お嬢さん、そ、そんな事は——」

「いいえ、そうだわ、そうだわ。お父さん、玉野はとても意地悪よ。叱って頂戴」

「玉野ッ」

きぬ子の言葉は新に油を注いだようなものだった。高林の顔は、見る見る蒼ざめた。

「貴様は嘘をいうかッ」

「わ、私は、け、決して——」

「黙れ、黙れ、貴様が態と蛇を追出したのだッ」

「はい、はい」

「貴様はよくも蛇をけしかけたな」

「はい、はい」

「その上に嘘をいったな」

「どうするか見ろ」

高林は手にした太いステッキを振り上げた。玉野は生きた心地はなかった。然し、彼は逃げようともせず、神妙にステッキの打ち下されるのを待っていた。

高林は急に考えを変えたらしく、振上げたステッキを打ち下そうとしないので、

「玉野ッ、貴様はあの蛇をどこで捕えたのか」

「——」

「捕えて飼って置いたのだらう」

「いいえ。そ、そんな」

「まだ嘘をいうかッ。飼って置いて、今朝そつと植込の下に隠して置いたのだらう」

「ち、違います」

「いいや、違わない」

と、高林は振りかぶったステッキを下して、

元の通り庭につきながら、

「玉野、今の蛇を捕えて来い」

「はい」

「早く捕えて来い」

「はい」

豊はホッとした気持ちになって、蛇の逃げて行った方を見たが、そこにはもう姿は見えなかった。

「何を愚図愚図しているかッ」

一難去って又一難である。ステッキの難は逃れたが、広々とした庭のどこに潜んでいるやら分らない蛇を捕えるのは、容易な仕事ではない。

然し、これ以上躊躇していると、又どんな恐ろしい事になるか分らないので、豊は急いで蛇の逃げて行った方に走った。

この辺と思われる草叢を箒で叩いて見ると、幸いだったのは、寒さの為に蛇の活動力が鈍っていたと見えて、遠くに逃げもせず、そこに縮まっていたので、箒に当って、ニョロニョロと這い出して来た。

（しめたッ）

豊は大喜びで箒で押えようとしたが、箒の目を逃れては、あつちにニョロニョロ、こつちにニョロニョロ這い廻って、幸いに弱っているから、素早く逃げては終わらないが、なかなか押えることが出来ない。

豊はあわて出した。愚図愚図していたら、高林は又何をいい出すか分らないのだ。

豊は箒をかなぐり棄てて、素手で蛇を追いつめた。

漸くの事で塀際に追いつめて、將に捕えようとする途端に、

「待ちな」

と軽く呼ぶ声がして、横合から魚を掬う手網が飛び出して、バタリ蛇を伏せて終った。

それは下男の作の助太刀だった。

「有難う、作さん」

豊は額の汗を手の甲で擦りながら礼をいうと、作は、

「礼には及ばないよ。だが、豊さん、無暗に蛇を手捕えにするんじゃないよ」

「だって——」

「豊さんはこんな蛇を見たことがあるかい。日本には余り見ない蛇だよ。寒さで弱っていたからいいものの、元氣だったら、お前さんは夙うに食いつかれてるぜ」

「どうも有難う」

「まあ、いいや、それより愚図愚図していると、又うるさいから——ええと、うまくこの網の中に入れて終おう」

といって、その辺に落ちていた木片で蛇の身体を掬い上げるようにして、素早く伏せていた手網の中に追い込んだが、

「おやッ」

と、驚いたように叫んだ。

「どうしたの、作さん」

「この蛇は眼が潰れている」

「えッ」

手網の中を覗き込むと、作のいった通り、両方とも眼が無惨に潰れていた。

「どうしたんだらう。箒で潰したのかしら」

「いいや、箒で押えた位で潰れるような、やにこい眼じゃない。この通り、すっかり抉り取られている。人間のやった仕業だ」

「誰がそんな事をしたんだらう」

「道理でのろのろしてやがった」

作は豊の間に答えないで、独り言のように呟いて、暫く考え込んでいたが、

「豊さん、急いでこれを持って行くがいいや」と、手網を渡した。

「作さん、有難う」

豊は三度目の礼をいって、手網をもって、高林の方に駆け出した。

守 袋

昆虫飼育場に奇怪な本藤老人を訪ねてから、二三日、獅子内は一日に一度ぐらい附近に行つて、それとなく様子を探っていたが、別にこれという変わった事もなかった。

三日目の夕、彼は又ぶらりと下北沢に出かけた。飼育場の内外にはやはり変わった事もないので、本藤老人が広告の文案に書いた、例の材木置場に行つて見ると、そこは一寸した空地に